

【一】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 終始、和やかな雰囲気では進んだ。
- ② 研究所を都心から郊外にイセツする。
- ③ 自由とハクアイの精神こそがこの国の根本だ。
- ④ 新しい企画をティアンする。
- ⑤ 自動車産業は、わが国のキカン産業である。

(1)

【二】 次の文章は、スマートフォン（スマホ）について書かれたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

毎朝の通勤通学の風景。駅のホームに並び電車を待つ人々。彼らの九割以上がスマホをのぞきこみ、一心に指を滑^{すべ}らせています。もう見慣れた、あまりにも「あたりまえ」の日常のワンシーンといえるでしょう。でも私は毎日この情景を見るたび、それぞれ異なった人々がまったく同じ姿勢を保ち、同じ動作をしている画一^{いち}さ、均質さを感じます。同時にスマホに¹飼^かい慣^ならされてしまっている私たちの姿であることに気づき、戦慄^{せんりつ}しているのです。

スマホはついぶん前から日常化し、身体化しているメデイア^{注1}と言えるでしょう。終日、なんらかのかたちでスマホに依存している私たちの日常があるとして、その状態をどのように私たちは考えればいいのでしょうか。

「1」アルコールや薬物と同じように考え、スマホに過^か剰^{じょう}に支配された姿を依存症と呼び、一つの「病い」と考えることもできるでしょう。「病い」であれば、私たちがその症状から回復するための「治療法」や「処方」が考えられます。スマホを使う時間帯を制限するとか、学校ではスマホの使用を禁止するとか、ある規制をつくりあげ、私たちがスマホの関係を改善していくという方向性です。

「2」、スマホとの適切なつきあい方を、スマホとより円熟した関係をつくりあげている「先輩」からわかりやすい説明で、伝授してもらうという方向もあるでしょう。巷^{ちまた}にスマホとの効果的なつきあい方やスマホの活用方法をわかりやすく語るノ^{注2}ーハウ本が氾^{はん}濫^{らん}しているのも、こうした発想の表れと言えるでしょう。

でも、いずれの「処方」にしても私たちの大半が用いること自体に抵抗すら感じなくなっているスマホと日常的な関係のありようを「依存」や「病理」^{注3}という視角から考えること自体、私たちがすでにスマホという魅力ある魔性^{ましやう}のメデイアに絡^かめとられていることの証^{しるし}左^{ひだり}ではないでしょうか。

(中 略)

(2)

片手に収まる端末としてのスマホ。それは画像や動画も撮れるし、鮮明な映像もみることができるし、もちろん電話の機能も備えています。すでにコンピュータの端末以上の機能を持っています。こうした道具を手にしてまさに一日中何らかの形で操作をすることで、私たちは「今、ここ」で、目の前にいるあなたとだけ出会えるのではなく、瞬時のうちに、「今、ここ」を超越し、多様な現実とつながることができます。スマホを使いこなす日常で、私たちはいったい何を手にして、何が脅かされているのでしょうか。それは端的に言って、「世界」を携帯する悦楽であり、その裏返しとして「わたし」が不特定多数の匿名の人々にさらされるリスクだと私は考えています。⁴

コンピュータが開発されインターネット社会が登場してずいぶん時間がたっています。私はノートパソコンでこの原稿を書いています。少し前であれば、デスクトップのパソコンを前にしてキーボードを叩いていたはずですが。原稿を書いて少しくたびれれば、ワードを閉じて、メールが届いていないか確認したり、ネットを開けてさまざまな情報にアクセスしたりします。ただこうした営みは、まさに「机を前にして」私がやっていることなのです。でも今は、「机を前に」する必要もないし、「ノートパソコンを膝の上に置く」必要もなく、ただ手のひらに収まっているスマホに指を滑らせることで、いつでもどこでも「世界」を自分の前に開くことができるのです。

デスクトップからスマホへ。これは単なる道具の技術革新だけではないのです。「机の前に座ったり」「部屋にこもったり」「何インチかの画面に集中したり」など、まさにネットへ私たちが向きあうためだけに一定の手続きや姿勢の変更、意識の変更が必要だったのが、そうした身体的動作や日常的な意識の変更をせずに、いつでも私たちは「世界」と向きあえるようになりました。このことが、日常生活していくうえで決定的な生活の「革新」をもたらしたと考えます。

なにか特別な手続きや意識の変化など一切不要で、いつでもどこでもネット「世界」を開き、自分自身をそこで遊ばせることができるのであれば、これはこのうえもない刺激や興奮をもたらす、えもいえぬ悦楽ではないでしょうか。こう考えてくれば、「歩きスマホ」は必然であり、当然の結果なのです。

日常的な道徳やエチケットとして、あるいは危険な事故を防ぐために「歩きスマホはやめましょう」と連呼することはできて

も、それだけで絶対「歩きスマホ」はなくならないでしょう。「3」、そうした規制の声が耳に入らないくらい、圧倒的に私たちは今、「世界」を携帯できる悦楽に魅了されてしまっているからです。「世界」を携帯できる悦楽に驚き、魅了されているかぎり、「歩きスマホ」は思いつきり自然な営みであり続けるでしょう。

「4」、どうなれば「歩きスマホ」はなくなっていくでしょうか。私は、こう夢想します。「世界」を携帯できること自体、特に驚くべきことでもないし、魅了されることでもない、その意味で陳腐で「あたりまえ」という意識を私たちがもつこと。それができて初めて、「歩きスマホ」が日常生活に様々な支障をきたすということを、本当の意味で私たちは自らの「臍」に落とすことができるのではないのでしょうか。

(中略)

今一つ、考えるべき重要な問題は、スマホという「A」から自分自身のプライベートな領域が際限なく拡散していくこととであり、それに伴うプライベートな領域が被るリスクや侵害をどう考えるべきかということです。⁶

情報をめぐるリテラシーが、「A」から入ってくる情報と私たちがいかに向き合うかを考える問題でした。これに対して、プライベートな領域の際限なき拡散と領域が被るリスクと侵害は、私たちが「A」からどうしようもなく自分の情報が漏れ出していくことをどう考え、どう対処するのか、また自分の情報を外の世界に向けてどのように放出していくのかを考えると、この次元の問題といえます。

「私は自分が好きな写真を(インスタグラムに)あげてただけです。それをみなさんが気に入ってくれたことがとてもうれし

いし、ありがたいです」⁷

五〇〇万近くのフォロワーをもつインスタグラムの女王とされるタレントが先日テレビでこう語っていました。自分自身を被写体とした「好きな写真」をインスタグラムにあげ続けたと。それを見て楽しむのは、フォロワーの自由であって、私が与り知

らないところだと。私はこのコメントを聞きながら、いろいろと考えていました。

もちろんタレントでありテレビなどで仕事をする以上、自分自身が多くの人々にどのように受け入れられ評価されるのが大切だろう。だから自分の写真に対する批判や否定的な評価へのコメントはしないのだろう。コメント自体がさらなるタレントへの評価の源となることをよく知っている、したたかな姿だと感じ入っていたのです。

しかし同時に、プライベートな領域をめぐる捉え方に驚いてもいたのです。自分の普段の姿を映像にとり、Instagramにあげ続けるとき、自分の私秘的な（私的でできれば秘密にしておきたい）世界や領域はどのように保たれているのだろうか。それは、スマホという「A」から意図的に自分の私的な姿を流出させる営みであり、いわば「A」からプライベートな領域の中身は漏れ続け、外のより広い世界へ際限なく拡散し続ける営みと言えるのです。そうしたとき、自分自身をめぐる情報は、たとえて言えば際限なく膨張し続ける風船のなかにあるようなもので、私秘性を保つ「B」はどんどん薄く、破れやすいものとなり、破れてしまえば、自分自身をめぐる剥き出しの情報が、悪意や嫉妬などさまざまな情緒に満ちた匿名の権力のもとにさらされる危険性が生じてしまうのです。

もちろん先にあげたタレントにとっての「B」は限りなく薄くなる危険性はあるものの、決して破れることがない丈夫さやしなやかさを備えているのかもしれませんが。いったい彼女はどのようなようにして「B」を鍛えあげていったのだろうか。さまざまに「B」を脅かす危険と出会い、向きあうなかで、どのようにして破れないしなやかさが創造されていったのでしょうか。私は、そのことがとても気になります。そしてこれは、スマホと私たちの日常やスマホと私たちという存在との関係性を考えていくうえで、根本的な問いといえるのです。

おそらく、先にあげたタレントは、その答えを教えてくれることはないでしょう。また仮に「こうすればいい」と教えられるとしても、その答えは私たちすべてにあてはまる一般的で普遍的なものでもないでしょう。結局のところ、スマホが私たち一人一人異なる身体の一部と化してしまっている以上、私たち各々が自分にとっての「スマホのある日常」を、危機感をもって詳細に見直し、それを変革していかざるをえないのです。

（好井裕明『今、ここから考える社会学』）

※問題作成の都合上、文章を一部省略しています。また、文章中の小見出し等を省略したところがあります。

注1 メディア……ここでは情報を受信・送信するのに用いる機器のことを言う。「端末」も同じ。

注2 ノーハウ本……専門的な技術や知識などについて、わかりやすく解説した書物のこと。

注3 証左……証拠・あかし。

注4 リスク……損害や損失を受ける可能性のこと。

注5 ワード……マイクロソフト社が出しているワードプロセッサ（ワープロ）ソフト。文書を作成するのに用いる。

注6 情報をめぐるリテラシー……情報機器やネットワークを活用して、大量の情報の中から必要な情報やデータを収集、整理して活用する能力のこと。

注7 インスタグラム……スマートフォンなどで撮影した写真などを手軽に投稿できる画像共有サービス。また「Instagram（グラム）」あげる」とはそのサービスに写真を投稿すること、「フォロワー」とはその投稿者を支持・応援する人たちのことを言う。

問一 「1」「4」にあてはまる最も適当な言葉を次のア～キの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号を繰り返し用いてはいけません。

- | | | | |
|--------|--------|--------|-------|
| ア なぜなら | イ すなわち | ウ では | エ しかも |
| オ また | カ そのため | キ たとえば | |

問二 線1「スマホに『飼いやられて』しまっている」とありますが、これはどのような状態のことを言っているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のいる時間や空間を飛び越えて、あつという間に世界のどこへでもアクセスできるスマホの素晴らしさにすっかり心を奪われてしまっているということ。

イ 人間は多様な存在であるはずなのに、スマホが普及したせいで、暇さえあればみな一様にスマホをいじるようになり、個性を失ってしまったということ。

ウ スマホの登場・普及による私たちの日常生活の変化はあまりに急速で衝撃的であったため、私たちの意識がその変化にまだ追いついていないということ。

エ スマホの適切な操作方法を誰からも教わらないまま使っているため、コンパクトでありながら多様な機能を持つスマホをうまく扱えないというということ。

問三 線2「いずれの『処方』にしても」とありますが、「処方」というたとえを用いているのはなぜだと考えられますか。解答らんに合うように問題文中より三十八字で抜き出し、最初と最後の六字を答えなさい。

問四 線3「何が脅かされているのでしょうか」とありますが、「脅かされている」のは何ですか。問題文中より九字で抜き出して答えなさい。

問五 線4「わたし」が不特定多数の匿名の人々にさらされる」とありますが、これはどういうことですか。四十字以上五十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問六 A・B にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|-----------|-----------|
| ア A 窓－B 壁 | イ A 窓－B 境 |
| ウ A 穴－B 膜 | エ A 穴－B 壁 |
| オ A 門－B 膜 | カ A 門－B 境 |

問七 線5「私が与り知らないところだ」とありますが、この意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私に規制できるようなことではない。
- イ 私には想像することさえはばかれる。
- ウ 私が関わり合うようなことではない。
- エ 私などには計り知れないことである。

問八 次の(1)～(5)について、問題文の内容と合っているものには○、合っていないものには×を、それぞれ解答らんに記しなさい。ただし、すべてに○または×を記した場合は得点を与えないこととします。

- (1) 駅のホームなどで多くの人々が同じようにスマホをのぞきこむ様子を見ると、「みんなと一緒」であることを良しとする日本人の特質を感じずにはいられない。
- (2) スマホを持ち歩くことは「世界」を持ち歩くことと同じであり、その責任の重さを一人一人がしっかりと自覚することによって「歩きスマホ」はなくなっていくはずだ。
- (3) スマホの登場は、旧来のパソコンを不要にするような道具の技術革新であり、デスクトップパソコンが今後姿を消していくことはまちがいないだろう。
- (4) 「インスタグラムの女王」と言われたタレントの「自分が好きな写真をあげただけ」というコメントは、単純なようでいて実はきわめて巧妙なものである。
- (5) スマホとのつきあい方はあくまでも自分自身の問題であり、ノーマル本の内容に頼ったり、誰かに教えてもらったりするのではなく、各自で考えていくべきだ。

(9)

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昭和十六年（一九四一年）の夏、鈴木雄太の所属する普川商業野球部は、エースピッチャー滝山亭の活躍によって地区予選大会で優勝し、全国大会への出場を決めた。しかし、戦争の影響で全国大会が中止となってしまう。また滝山は、新しく配属された軍事教練の指導教官に暴力を振るわれ、大事な右肩を負傷してしまう。部員たちにとって満足に野球ができない状況のまま、地区予選の優勝から一年が過ぎようとしていた。

その知らせは、梅雨の貴重な晴天のごとく、雄太たちを明るく照らした。

「みんな、甲子園だ！ 甲子園に行けるぞ！」

新しく主将となった林が、飛び跳ねながらグラウンドに駆け込んできた。

めいめい練習に励んでいた部員たちはまずあつけにとられ、それから顔を見合わせ、猛然と走り出した。

「甲子園？ ほんとだよ！」「主催の朝日が、今年中止って発表したじゃないか」「撤回したのか？」

部員たちは林を取り囲み、次々と質問を浴びせかけた。林は誇らしげに胸をそると、とっておきの内緒話を明かすように言った。

「まあ聞けよ。たしかに、毎年朝日がやってる野球大会は中止だ。でもかわりに、文部省がやってくれるらしい」

「なんで文部省が。関係ないだろ」

「文部省の外郭団体に、学徒体育振興会ってのがあんだ。その主催の体育大会の一環として、野球の全国大会も開催するんだそう」

「じゃ、主催は違うけどいつもと形態は同じってことか？ 地区予選やって勝ち抜いたのが――」

(10)

「そう。甲子園での、全国大会だ」

林は、厳かな口調で言った。

しん、とあたりが静まりかえる。それは、¹ 昨年の夏、全国大会中止を知った時に訪れた沈黙とは、全く違うものだった。

「たぶんすぐ、地区予選が組まれるはずだ。ボヤボヤしてるヒマはないぞ！ 今年^きは佐川^{さかわ}中の配属将校も代わって、野球部も本腰を入れて練習してるっていうからな」

林の言葉に、部員たちは次々と雄叫^{おけい}びをあげた。

「よっしゃああああ！ 気合い入った！」

「今年こそ全国制覇だああ！」

「俺あ今年こそやるぞ！ 見てろかあちゃん！」

顔を紅潮させ、目を擦^{こす}りながら、彼らは猛然と走り出した。それまでほとんど惰性^{だせい}で続けられていた練習は途端に活気づき、昨年夏の盛り上がり^{さむらい}がそのまま戻ってきたかのようなようだった。

その中で、雄太はなんとなく興奮から取り残されていた。

「聞いたか？」

傍^{かたわ}らの長身を見上げると、彼はどうでもよさそうな顔で頷^{うなず}いた。

「耳^{みみ}ついてるからな」

「……肩は平気か？」

「甲子園ぐらいまではもつさ」

雄太は眉^{まゆ}をひそめた。

あの怪我^{けが}から、まだ一月も経^{ひとつき}っていない。教練の一件を聞いた久保監督は、滝山にしばらく投げないよう命じたが、滝山は数日休んだだけで「もう大丈夫」と勝手に投球練習を始めていた。

だが球を受けている雄太には、はつきりとわかる。球には、以前ほどの力はない。

「なんて顔してやがる」

雄太の頭を、グラブをはめたままの手で滝山がはたく。

「おまえが大好きな甲子園だろ。よかったじゃねえか」

「予選で優勝すればの話だ」

「させてやるよ、ちゃんと」

去年のこの時期と全く変わらない、不遜^{ぶそん}な物言^{ものごと}い。だが以前ほど腹は立たなかった。

「あいかわらず自信過剰だ」

「俺は甲子園へ行くために連れてこられたからな。大会があるなら、問題なく役割を果たすさ」

「甲子園へ行くため？ そういや、おまえと久保監督は昔から知り合いだったのか？」

「お袋の遠縁の知り合いだ。ほとんど他人だな。お袋は親戚から縁を切られてるし、金には結構苦労していた。甲子園に行けば稼^{かせ}げると聞いたんで、俺がとびついたんだ」

滝山は淡々と語った。全くのひとごとのようなようだった。

「結局、職業野球で稼^{かせ}ぐのは無理そうだが、恩は返さないとおふくろに叱^{のの}られる。こっちに来るにあたって、監督にはずいぶん世話になっちゃった。どうせもう後がないから、ぶっ壊れるまで投げまくってやるよ」²

滝山は笑った。言葉は自棄^{やけ}になってい²るようで気に入らなかったが、表情は妙に晴れ晴れとしていた。

普川商は大方の予想通り、地区予選から圧倒的な力を見せつけ、大差をつけて勝ち続けた。エース滝山はほとんど全ての試合に先発し圧巻の投球を見せつけた。

彼だけではない。どの選手も、そしてどの学校も、みな必死だった。

昨年の大会ももちろん皆勝つために必死だったが、今年はまた種類が違うように雄太は感じた。

——これが、最後の試合かもしれない。

そこに居合わせた誰の胸にも、その思いがあった。

来年にはもう、今年のような奇跡は起こらない。^{注3} 大本営発表は連日のように日本の大勝利を伝えるものの、相変わらず終わりは見えない。

^{注4} 学制が改正されて中等学校も五年から四年に短縮されたし、徴兵年齢も引き下げられた。今、最上級生の者たちは十六か十七だったが、卒業すればいつまた徴兵年齢が引き下げられて赤紙が来るかわからない。

好きなだけ野球が出来るのは、こうして歓声を受けて試合が出来るのは、これが最後かもしれない。

そんな切羽つまった空気と、野球が出来るという弾けるような喜びが、独特の熱気となって、球場を包んでいた。

試合が始まる前に、林は言った。

「いいか、明日のことは考えるな。とにかく今日、全力を出し切るんだ！」

それは、必ず甲子園に出場するという誓いとは相反するように見えて、³ 実のところ全く矛盾していなかった。どの学校もがむしろな気迫に満ち満ちて、全力であたらなければとても勝てそうになかったからだ。

滝山も、昨年のように力を抜くようなことはなかった。ぶっ壊れるまでという言葉通り、気迫のこもったピッチングを見せ続ける。少しでも肩に負担をかけまいとする雄太の配球はやはり完全に無視され、あいかわらず馬鹿正直な直球勝負だった。

そして迎えた七月末、地区予選決勝戦。

相手は、宿敵の佐川中だった。二年前、滝山の速球の前になすすべもなく唇を噛みしめていた橋本も、今や県内一のスラッガーとして名を轟かせている。

その日は、地獄のような暑さだった。空には雲ひとつなく、風ひとつそよがず、ただ太陽だけが容赦なく光と熱を撒き散らしていた。

昨年は初戦であっさり消えた佐川中は、その恨みを晴らすとばかりに猛攻をくわえた。三回までは滝山に完全に封じられていたが、ちょうど打者が一巡した四回に入ると、ぼろぼろと打ち始めた。

さすがに疲労が隠せなくなった滝山は、一番はサードゴロに打ち取ったものの、二番に死球を与えてこの日はじめての出塁を許してしまう。しかもその二番が盗塁に成功、三番は^{注5}ポテンヒット。

走者を一、三塁に置いたところで、四番の橋本に打順が回ってきた。彼は、ファウルで粘りに粘ったあげく、ライト線ぎりぎりの強いヒットを放った。長打コースのヒットに走者は二人とも生還、橋本も一気に三塁へ進んだ。

雄太は、すぐにマウンドに走った。すると、滝山にあからさまに嫌そうな顔をされた。

「なんだよ」

「今年に入って三塁打を打たれたのは初めてだろ？ さぞいい気分だろうと思って」

「……腹立つな」

「おまえに比べりゃかわいいもんさ。肩はどうだ」

「なんともねえよ」

⁴ 明らかに嘘だったが、雄太は「そうか」と答えただけだった。ここで仮に肩が痛いと言われても、自分に言うべき言葉はない。佐川中を相手に他の投手に代えることなどできなかったし、少しは楽な配球にしてやるから俺に従えと言ったところで聞くはずもない。

クラブで軽く滝山の尻をはたき、ホームに戻ろうとした雄太を、「鈴木」と低い声が呼び止めた。何かと思って振り向くと、滝山が苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

⁵ 「指示を出せ」

雄太は最初、なんと言われたのかわからなかった。一瞬の自失のあと、思わず「え？」と大声を出してしまった。滝山はますます不機嫌そうに顔を歪めた。

「最後の県大会だから記念にきいてやる。そのかわり、弱気な配球しやがったらてめえに当てるぞ。おまえ、すぐ外に逃げるかな」

「お、おう」

雄太は何度も頷き、慌ててホームに戻った。

信じられなかった。まさか滝山のほうから、あんなことを言うなんて。

（なんだよ、サイン見てねえって言ってたくせに、しつかり見てたんじゃないか）

しかし雄太の胸に湧いたのは、喜びとはほど遠い感情だった。記念などと言っているが、要するにそれだけぎりぎりの状態ということだ。佐川中相手に、自分一人では投げきれないかもしれないと、はじめて滝山が弱気になった証だった。

雄太は唇を噛みしめてミットを構え、右手でサインを送った。滝山が、小さく頷く。そして、雄太が指示した通りのコースに、指示した通りのゆるい球を放ってきた。

構えた場所にあやまらずボールがおさまったとき、雄太は言いしれぬ感動に襲われた。⁶

こんなに嬉しいものだとは思わなかった。同時に、諦めずに毎回サインを出してきてよかったと心から思う。どうせ滝山は言うことを聞かないのだから何を考えても無駄だとは思ったが、湯浅に言われて、全ての試合で指示は続けた。それを怠っていたら、こんなに落ち着いて指示することはできなかっただろう。

滝山は速球投手によくあるように真つ向勝負で三振を取りたがるが、今はとてもそんな余裕はない。いかに少ない球数で打ち取っていくかが最優先だ。相手も、滝山は三振を狙ってくると思いいこんでいるから、騙しやす^{だま}い。

滝山は、雄太の指示通りに投げ、次の打者をあつというまにファーストゴロで打ち取った。ここからも、ショートを守る林がばかんとしているのが見えて、雄太はつい笑ってしまった。しかたがない。林も、自分のチームの投手と捕手が、ともにバッテリーとして機能しているところを見るのはこれがはじめてなのだから。

次の打者も三球目でファウルフライに打ち取り、攻守交代となった。今度は、普川商の打線が佐川中を攻め立てる番だった。

普川商はこの回に一点、そして六回にもう二点を追加し、3対2の一点リードをもぎとった。

一方、四回の失点以降、滝山と雄太のバッテリーは、相手に点を許さなかった。

試合は3対2のまま九回に入り、佐川中が最後の攻撃に入った。

（須賀しのぶ「雲は湧き、光あふれて」『雲は湧き、光あふれて』所収）

注1 朝日……朝日新聞社。

注2 文部省……現在の文部科学省。

注3 大本営発表……太平洋戦争中に実施された、日本軍の最高機関による公式発表。

注4 学制……学校教育に関する制度。改正前までは、当時の中学校には満十三〜十七歳までの生徒が通っていた。

注5 ポテンヒット……内野手と外野手の間に落下するヒット。

注6 湯浅……雄太の一学年上の先輩。前主将。

問一

~~~~線 a ~ c の問題文中の語句の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(a) 「眉をひそめた」

- ア 疑いと心配で顔をしかめた
- イ 不快だと目で合図をした
- ウ 信用できず顔をこわばらせた
- エ 怒りの形相でにらんだ

(b) 「不遜な物言い」

- ア 恩着せがましい言葉遣い
- イ 相手を見下した口ぐせ
- ウ 思い上がった話し方
- エ 失礼な異議申し立て

(c) 「苦虫を噛み潰したような顔」

- ア 苦しくて救いを求める表情
- イ 非常に不愉快そうな顔つき
- ウ 不機嫌で性格の悪そうな面構え
- エ とても不細工な顔立ち

問二

——線 1——それは、昨年の夏、全く違うものだった」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 部員たちが言葉を発しないのは、全国大会の中止に落胆していた昨年とは違い、今年は実施されるという全く逆の内容を、しかも急に知らされたために混乱してしまい、その吉報をきちんと把握できていない状態だといいこと。

イ 部員たちが言葉を発しないのは、昨年の全国大会の中止を知って感じたように絶望をしたわけではなく、甲子園へ出場できる可能性が出てきたために、林の言葉をどう受けとめて良いか分からず、あっけにとられている状態だということ。

ウ 部員たちが言葉を発しないのは、全国大会の中止に言葉を失った昨年とは異なり、念願の大会開催という朗報を聞き、これで全国制覇ができる可能性も見えてきたため、湧き上がる喜びを必死でこらえている状態だということ。

エ 部員たちが言葉を発しないのは、昨年全国大会の中止を知り、無念さを味わって絶句した時とは違って、念願の佐川中との対戦がやっと現実味を帯びてきたことで、林の口からその言葉が発せられるのを緊張して待っている状態だということ。

## 問三

——線2「表情は妙に晴れ晴れとしていた」とありますが、これはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 滝山は右肩を怪我してしまったために、今回の大会を全力で投げ抜いたら野球ができなくなるかもしれない、その上もう職業野球で稼ぐことはできないと悟っていたが、投げやりになることでそれら全ての不満を忘れ去っていたから。

イ 滝山はお金が目的で野球に打ち込んでいることに後ろめたさを感じていたが、今までいろいろと面倒を見てくれた監督の恩義に報いることで、苦勞している母に余計な心配をかけずに済むと考え、悩みが解消してすっきりしたから。

ウ 滝山は社会人になって野球を続けていくことができないと分かり落ち込んだものの、自らを犠牲にして甲子園に行くことが、チームのためだけではなく母親やお世話になった監督のためになると考え、前向きな気持ちになったから。

エ 滝山は野球で生計を立てていくことが叶わなくなった今、いまだ右肩に不安はあるものの、そのことは考慮せずに、最後の試合になるかもしれない今大会で全力を尽くすことが自分のやるべきことだと、自分自身を納得させたから。

## 問四

——線3「実のところ全く矛盾していなかった」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さししまった状況のなか、どの相手校も必死に大会へ臨んでおり、地区予選を最後まで勝ち抜くには、全ての試合で気を抜くわけにはいかなかったということ。

イ 林だけでなく全員が、この大会が思いっきり野球をする最後のチャンスかもしれないと考えており、何よりもまずは全員の一致団結が不可欠だったということ。

ウ 余裕のない雰囲気覆われた部員たち全員を激励するという行為は、試合にリラックスした状態で臨むことへ繋がりが、実力以上の結果を期待できるということ。

エ チーム全体の実力を向上させるために、ひと試合ごとに全ての力を出し切ることが重要で、更に強い相手校とも互角に戦うことができるようになるということ。

問五 ――線X「唇を噛みしめていた」・Y「唇を噛みしめて」とありますが、これらの表現の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Xは、滝山の投球に何とかして対応しようとする橋本の真剣さを表しており、Yは、気を引きしめ直して滝山をしつかりリードしようとする雄太の覚悟を表している。

イ Xは、滝山の投球に何とかして対応しようとする橋本の真剣さを表しており、Yは、弱気になった滝山を勇気づけられなかった自分に対する雄太の無念さを表している。

ウ Xは、滝山の投球に対応できない自分に対する橋本の悔しさを表しており、Yは、気を引きしめ直して滝山をしつかりリードしようとする雄太の覚悟を表している。

エ Xは、滝山の投球に対応できない自分に対する橋本の悔しさを表しており、Yは、弱気になった滝山を勇気づけられなかった自分に対する雄太の無念さを表している。

問六 ――線4「明らかに嘘だった」とありますが、これと同じような「嘘」についている滝山の様子描写を含む一文をこより前の問題文中から探し出し、初めの三字を抜き出して答えなさい。

問七 ――線5「指示を出せ」とありますが、この言葉を雄太はどのように受けとめたと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 怪我をしているとはいえ一人で投げ抜いてきたのに、弱気になってしまったことが許せず、信念と反する言葉を発することで、自分を罰しようとしている。

イ 肩を怪我している自分一人の力では佐川中に勝てそうにないと判断し、このまま投げ続ける以上、雄太に協力を切り出して状況を好転させようとしている。

ウ 実は昔から頼りにしていた雄太が、自分の切羽つまった時を見計らって声をかけてくれたため、決勝のこの土壇場で、きちんと本音を伝えようとしている。

エ 追いつめられたピンチの状態の自分に、あえて皮肉を言い近づいてきた雄太に対して腹が立ち、この後の責任は全て雄太に背負ってもらおうとしている。

問八 ――線6「言いしれぬ感動に襲われた」とありますが、この時の雄太の気持ちに六十字以上七十五字以内で説明しなさい。

問九

問題文中の「雄太」について説明したものととして正しいものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

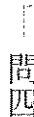
- ア 雄太は滝山や他の野球部員たちとは違い、去年から野球への情熱をずっと絶やすことなく保ち続けていた。
- イ 雄太は、滝山のことを身勝手な人物だと思っていたが、チームに必要なメンバーであることは認めていた。
- ウ 雄太は滝山が打たれることをずっと期待しており、決勝でその機会がやってきたことを内心嬉しく思った。
- エ 雄太は滝山と同様に、もしかしたら野球のできる最後の年になるのかもしれないと、何となく考えていた。
- オ 雄太は、自分のサインを無視し続ける滝山にいつか後悔をさせるため、サインを出すことはやめなかった。
- カ 雄太は、自分のサインで相手を抑えることができたため、初めて滝山に対して優越感を得ることができた。

国語解答用紙

8

$\textcircled{2} \times 4$   
 .....  
 問  
 一

|   |
|---|
| 1 |
|   |
| 2 |
|   |
| 3 |
|   |
| 4 |
|   |



$\textcircled{4} \times 3$

問四

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |

問三

|   |
|---|
| 初 |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |

S

|   |
|---|
| 終 |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |
|   |

問二

|  |
|--|
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |
|  |

から。

[illegible]



② × 5

問 八



③ × 2

問 六

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

問 七

[illegible]

3

×

2

↓  
 ↓  
 ↓  
 ↓

問九

|    |  |    |
|----|--|----|
| 【  |  | 10 |
| 【  |  | 45 |
| 【  |  | 45 |
| 総点 |  | 10 |

受験番号

氏 名